



2018年1月25日発行（季刊）

特定非営利活動法人 市民シンクタンクひと・まち社
〒160-0021 新宿区歌舞伎町2-19-13 A S K ビル 501

TEL 03-3204-4342 FAX 03-6457-6202

E-mail npo@hitomachi.org URL : <http://www.hitomachi.org>

郵便振替口座 00170-6-410791 市民シンクタンクひと・まち社

旧満州への旅をして その3～引き揚げ船の出た港—葫蘆島へ～

市民シンクタンクひと・まち社理事 木下伸子

6月13日、無蓋貨車に乗って引き揚げたことの追体験をするため、8:36 長春発葫蘆（ころ）島行の高速鉄道に乗った。高速列車は当時走った在来線とは全く別ルートで走っているとのこと。当初、鈍行に乗りたかったのだが、朝6時出発で6時間ぐらい乗らなければならないということなので、諦めた。

☆いまは緑の草原は見られない大地

列車は平日なのに家族で旅行しているらしい中国人などで満員。声高な中国語が飛び交う賑やかな車中の3時間の旅が始まった。昨日と同じくほぼ300km/時で走るとして、目的地まで900kmくらいあると思われる。

私たちは進行方向に向かって右側に座ったが、満員状態の列車では反対側の車窓からの景色はほとんど見ることができない。ひたすら自分の席から眺める景色は、瀋陽（しんよう）（昔の奉天）など大きな駅の周辺は高層ビルが建っていたり都会的だが、大部分の景色は赤土だった。所々畑らしいところもあるが、脳裏にある一面の緑には程遠い。赤土は、ずっと干ばつが続いているせいだと、ガイドのK氏が説明してくれた。乗りたかった在来線沿線も同じだろうか。食糧などに影響はないのだろうか。

脳裏にあるのは、緑の平原と、もう一つ、その真只中に機関車のない無蓋貨車に乗った開拓団の人たち。現地の機関士たちに金銭を要求されたが支払えなかったので、おいて行かれてしまったのだそうだ、引き揚げに当たっては色々な制限があり現金も決められた額しか持てなかったの、こちら自分たちのことで精いっぱい。助けることができず、「頑張る」、「気を付けて、無事に帰国するように」と言い交わして追い抜いてきた。その当時、難民と呼んだあの人たちは無事引き揚げられたのだろうか。どの辺りだったのか見当もつかないまま、列車はほぼ予定通り12時前に葫蘆島北駅についた。

☆静かなリゾート地、葫蘆島に

葫蘆島北駅は実にさっぱりした駅だった。あまり降りる人もいなかったように思うが近年、国の富裕層が別荘を持っ

たりリゾート地化していると聞いた。いわゆる駅ビルもなく改札のところに小さな売店があるだけで、何か記念に、と思っても土産物屋もない。売店で瓢箪を7つばかり付けた壁飾り一つ売っていたので買った。葫蘆島というのは、瓢箪の形をした島があるのでついた地名だという、つまり葫蘆は瓢箪のことなのだ。しかし、その壁掛けには葫蘆島の表記もなく、日本の土産品からは考えられない体裁だ。

改札を出ると乗用車が1台待っていた。大型ではあるが、大きなスーツケースを持った大人5人が乗るには窮屈だった。その上、運転手のほかに葫蘆島市政府の職員で一応ガイドという男性が乗っている。しかし、いろいろ説明をすることもなく、むしろ、監視されているような感じだった。北京などの大都市では、それぞれの政府の外事弁公室（日本の国際交流担当部署）が旅行会社の役割も果たし、職員が通訳やガイドも兼務しているようなところが多いが、外国からの観光客がほとんどにいない葫蘆島市政府にはこうした部署がないらしい。たまたま私たちのような客が訪れるときにはどこかの部署の職員が付き添うようだ。引き揚げ列車が着いた当時の葫蘆島駅舎に行き、その後引揚者を収容したところの跡地でも行ってみたいと頼んだが、まったくそういう知識はないようだった。

☆港の見える丘で日本人のグループと

葫蘆島北駅から車で20分ぐらいいらうか引き揚げ船が出港した港を見下ろす丘の上に、葫蘆島市政府が建てた石碑が建っている。 ※(4ページに続く)

